法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-12

琵琶古楽譜の独奏曲 ： 失われた演奏伝承の「再生」に向けて

NELSON, Steven G. / ネルソン, スティーヴン・G

(雑誌名 / Journal or Publication Title)
科学研究費助成事業 研究成果報告書
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
5
(発行年 / Year)
2018-06-16

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：３２６７５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３７０１１２

研究課題名（和文）琵琶古楽譜の独奏曲―失われた演奏伝承の「再生」に向けて―

研究課題名（英文）Solo pieces for lute _biwa_ in old notations: 'Reproducing' a lost performance practice

研究代表者
Ｎｅｌｓｏｎ　Ｓｔｅｖｅｎ（Nelson, Steven G.）

法政大学・文学部・教授

研究者番号：６０３２６１７１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：日本で古代から中世にかけて盛んに演奏されたものの、後に伝承が途絶えてしまった琵琶の独奏曲、すなわち琵琶の「撥合」（かきあわせ）と「手」（て）について、その全貌を明らかにするべく、現存楽譜の翻刻と五線譜化を行った。琵琶奏者、中村かほる氏の協力を得て舞台での復元試演を行い、秘曲として重視された４曲を含め、代表的な撥合と手を録音し、後の発信に備えた。調絃を確かめるための小曲である撥合には、主要音の同音反復の音型が多く、調性は日本化された音階理論に基づいている。一方、手は伝来当初の諸特徴がよく保持され、調性については撥合と同様の変容は見られない。

研究成果の概要（英文）：This research represents an attempt to evaluate the lost repertory of tuning pieces (_kakiawase_) and modal preludes (_te_) for solo performance on the lute _biwa_ of ancient to medieval Japan. Notation in surviving scores was deciphered and transnotated into staff notation. With the cooperation of the _biwa_ player NAKAMURA Kahoru, several stage performances were mounted, and recordings made of representative pieces, including the four that gained prominence as 'secret pieces' in the medieval period. The tuning pieces display many phrases with repeated striking of the main tones (tonic and dominant) of the mode; some in modes with a major third degree demonstrate a distinctive shift in modal usage, with sharpening of the fourth and seventh. The modal preludes, in contrast, appear to retain their original (Tang Chinese) musical language, with no significant change in modal usage.

研究分野：日本音楽史学

キーワード：楽琵琶　古楽譜　唐楽　復元　三曲　三秘曲　源氏物語　黄鐘調

１．研究開始当初の背景

筆者は 1980 年の来日以来、琵琶の古楽譜を主たるテーマの一つとして研究を行ってきた。2012 年に総括的な論考（引用文献①）を発表したが、その後、二つの要因から、この研究をさらに発展させる必要が生じた。

(1) 2012 年から研究代表者として行った「古代東アジア音楽の検証可能な「再生」へ向けて―解読から鳴り響く音楽への過程―」（挑戦的萌芽研究）の具体的な実施例から得られた知見。2012 年 12 月のレクチャー・コンサートで、琵琶奏者の中村かほる氏の協力を得て、琵琶秘曲《大常博士楊真操》《石上流泉》《上原石上流泉》《啄木調》を、平安時代末成立の『三五要録』（藤原師長撰）所収の楽譜に基づいて復元試演を試みたところ、4 曲が共通に持っている音楽的特徴、すなわち音楽形式の整った旋律が 8 単位から成るリズム周期の中で繰り広げられる構造がはっきりと現れた。他に多く存在する琵琶独奏曲に同様の特徴があるか否か、その全貌について具体的に検討する必要があると感じた。

(2) 宮内庁書陵部蔵の琵琶古譜の新出。2013 年 6 月の新聞等では、同じ料紙（色紙 7 種）を使用する「琵琶諸調子譜」59 枚、及び「琵琶譜」25 枚から成る、纏まった量の琵琶譜と報道されたが、後者は既に 1964 年に「伏見宮本琵琶譜」として複製本が刊行されたもので、貞保親王（870-924）が勅命を受けて弟子の敦実親王（892-967）のために編纂した琵琶秘手譜『南宮琵琶譜』の伝本と、藤原貞敏（807-76）が唐の琵琶博士、廉承武から受けた伝授譜『琵琶諸調子品』の伝本という内容であった。一方、前者は新出史料であったので、「伏見宮本琵琶譜」との関係や、その内容を具体的に明らかにすることが急務であった。

なお、(1)の関心から、研究対象としたのは琵琶古楽譜における独奏曲であった。これらの独奏曲には 2 種類がある。すなわち調絃を確かめるための短い「撥合」（「かきあわせ」）（「緒合」、「絃合」とも）、及び音楽的により豊かな内容を持つ「手」（「秘手」「調」「調子」とも）である。秘曲（上記の 4 曲）は後者に含まれる。独奏曲を最も多く掲載する『三五要録』には「撥合」が 24 曲、「手」が 21 曲、合わせて 45 曲ある。

２．研究の目的

このように奈良時代から鎌倉時代にかけて成立した琵琶の古楽譜には多くの独奏曲があるが、一方、現行の雅楽の演奏伝承では琵琶の独奏曲は演奏されておらず、ごく一部を除きその伝承は途絶えたと断定してよい。本研究は、鎌倉時代までの琵琶独奏曲の全貌を明らかにすることを目的とした。まず、文献学的な手続きに則って楽譜本文の翻刻を行い、その音楽的な内容の比較検討を可能にするために五線譜化（訳譜）した。これを基に復元試演を中心とした吟味を行い、最終的には解説付き視聴覚資料の形で記録・保存し、後の発信に備えることとした。

本研究は、以上の目的を果たすことにより、これまでの関連・隣接分野における不足を補完することもできると期待した。具体的には次の通りである。

(1) 中世を境に伝承が途絶えてしまった、唐代伝来の音楽文化の重要な部分について、形式・調性など、その音楽的な諸特徴を明らかにすること。

(2) 日本の天皇・公家にとって重要であった琵琶の伝承内容を具体的に示すこと。近年、この伝承に関わる基礎史料の翻刻（図書寮叢刊『伏見宮旧蔵楽書集成』、1998 年までに 3 冊）、音楽史的研究（相馬万里子 1998「琵琶の時代から笙の時代へ」、磯水絵 2000『説話と音楽伝承』、豊永聡美 2006『中世の天皇と音楽』など）が次々に発表されているが、伝承の音楽的内容が全くといってよいほど触れられていない。

(3) 琵琶を主要楽器として後に成立した音楽ジャンルへの影響を、具体的に量れるようになること。平家琵琶研究の第一人者、薦田治子は、「平家琵琶で新たに考案された奏法」について論じているが、先行する琵琶独奏曲の内容や、その中で見られる特殊奏法を考慮しておらず、論証が不十分である。

３．研究の方法

新出史料や未調査の琵琶古楽譜に関する史料調査を実施するとともに、すでに調査済みの楽譜については先行して本文の校合作業を進め、テクストを確定し、翻刻した。これを鳴り響く音楽として「再生」し、記録するために、次の方法を用いた。すなわち、解読の結果得られたもの（音高と相対的な長さを持った音列に、奏法に関する注意書きを加えたもの）を、①事前の打合せの場で楽器奏者に提示し、筆者の知見と奏者の経験知とを照らし合わせながら、演奏する内容（演奏用楽譜）を決める。②「再生」を舞台上で試みる。一度演奏を試みた後、③改めて奏者と相談の場を設け、相互的フィードバックを参考に楽譜の調整を行う。④最終的な調整の結果を録音して、翻刻・訳譜とともに視聴覚資料として保存し、後の発信に備える。

４．研究成果

まず、本研究のきっかけの一つとなった新出史料「琵琶諸調子譜」について資料調査を行った結果、琵琶独奏曲の楽譜を含まないことが判明した。そのため、分析・研究を博士後期課程学生、RA の根本千聡に委ねた。その結果は東洋音楽学会第 67 回大会（2016 年 11 月）で報告され、機関誌『東洋音楽研究』に資料紹介として掲載された（引用文献②）。

研究方法②、すなわち舞台上の「再生」については、琵琶奏者の中村かほる氏の協力の

もと、国際学会で披露する機会を 2 回得ることができた。第 1 回は、2017 年 3 月、東京で開かれた 20th Congress of the International Musicological Society（国際音楽学会第 20 回世界大会）で、ラウンドテーブルでは実演付き研究発表（学会発表②）、コンサートでは解説付き演奏（その他②）を行い、琵琶独奏曲のうち、琵琶風香調《撥合》、同《二手 丘泉》、琵琶返風香調《上原石上流泉》、琵琶黄鐘調《二手》、琵琶啄木調《啄木》の 5 曲を取り上げた。第 2 回は、2017 年 9 月、上海で開かれた第 12 回中日音楽比較シンポジウムで、実演付き研究発表（学会発表①）、さらに同日夕方の音楽会の一部として解説付き演奏「琵琶の秘曲」（その他①）を行い、上記の 5 曲に加えて、琵琶風香調《大常博士楊真操》、琵琶返風香調《石上流泉》、合わせて 7 曲を取り上げた。

舞台上の「再生」は、時間的な制約があって曲数は限られたものとなったが、準備段階、及び後日の相談・相互フィードバックを重ねた結果、琵琶独奏曲総数の約 3 分の 1 を録音に備えることができた。録音は、主に継続研究・調査報告用と位置づけて、2018 年 3 月 23 日に、千駄ヶ谷ビクタースタジオにて行った。現存最古の琵琶譜『天平琵琶譜』関連は 3 トラック、『三五要録』巻二の譜面を中心に据えて 14 トラック、合わせて 17 トラックの録音となった。内容は次の通りである。

(1) 正倉院文書紙背琵琶譜（いわゆる『天平琵琶譜』）。調絃は、黄鐘調の音階となるよう、『三五要録』の琵琶黄鐘調（現行の平調）より 4 度高い調絃（A-e-a-d'）とした。

01 冒頭部分	0 分 40 秒
02「調」以下の部分	0 分 50 秒
03「調」以下の推定復元	1 分 42 秒

(2)『三五要録』巻二の琵琶独奏曲（『三五中録』・『知国秘鈔』をも参照）。

a　琵琶風香調（A-c-e-a）

04 撥合	0 分 50 秒
05 二手 丘泉	1 分 25 秒
06 大常博士楊真操	1 分 55 秒

b　琵琶返風香調（G-A-d-g）

07 撥合	1 分 40 秒
08 一手 丘泉	1 分 10 秒
09 三手 番仮宗	2 分 10 秒
10（三手）又弾	1 分 32 秒
11 石上流泉	3 分 25 秒
12 上原石上流泉	1 分 22 秒
13 将律音	0 分 23 秒

c　琵琶黄鐘調（E-B-e-a）

14 撥合	0 分 45 秒
15 一手	1 分 07 秒
16 二手	2 分 22 秒

d　琵琶啄木調（G-G-d-g）

17 啄木	3 分 17 秒

本研究を進める中で明らかになった点、課題として残った点がそれぞれいくつかあるが、具体的に列挙する前に、まず指摘しておきたいことがある。鎌倉時代までに成立した楽譜資料及び楽書類を見れば明白な事実だが、独奏曲には 2 種類、すなわち「撥合」（かきあわせ）と「手」とがあること、そして複数の調絃法があることが、存外知られていないことである。同時代の箏（箏の琴）にも同種の独奏曲が多く存在すること、複数の調絃法があることも同じ。両楽器の独奏曲が『源氏物語』等の古典文学作品にたびたび現れるが、公開されている注釈の多くは現行雅楽の在り方しか考慮しておらず、そのため誤った解釈が横行している。これに関連して、『源氏物語』における絃楽器の曲種と調絃の問題を取り上げ（雑誌論文③）、また琵琶の場合には調絃法の旧名称と調子の名称との関係が煩わしく、誤解が生じやすいことを短い具体例で示した（雑誌論文②）。

さて、伝承が途絶えてしまった琵琶独奏曲の楽譜を、鳴り響く音楽へと蘇らせようとする際、ほとんどの場合調絃がわかるので譜字（絃とフレットの交差する箇所を指す文字）が指し示す音高（pitch）を読み取るのは容易い。問題となるのは、奏法（特に基本奏法）と時間的側面、すなわちリズム、各譜字の音価［長短］やテンポ［緩急］の問題である。前者については、現行雅楽における、琵琶の重々しいアルペジオ（分散和音）奏法が元からあったか否かという疑問が生じるが、今回は 13 世紀初頭成立の琵琶師伝集『胡琴教録』の解釈に基づいて、基本奏法をアルペジオ風ではなく、単音を弾ずる技法とした。

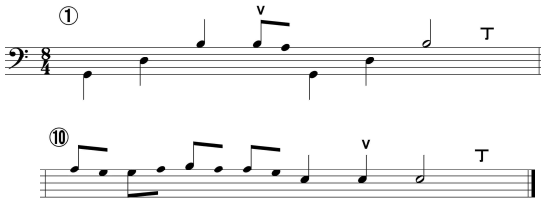
リズムに関しては、「手」の中でも秘曲《大常博士楊真操》《石上流泉》《上原石上流泉》の記譜が単純明快な表記、「初期リズム表記」とでも命名できる譜式となっている。《上原石上流泉》を例に挙げる。

図表　《上原石上流泉》の譜面（横書きに整理）

凡例：1～8 は拍、①～⑩はそれぞれ 8 拍から成る周期

	1	2	3	4	5	6	7	8	
①	一	ク	ム	✓ム 八	一	ク	ム	丁	
②	一	ク	ム	✓ム 八	一	之	丄	丁	二返
③	一	ク	ム	✓ム 八	一	コ	ク	丁	
④	一	ク	ム	✓ム 八	一	之	丄	丁	二返
⑤	七	乞 七乞	丄	乞 七	コ	ク	コク]	丁	
⑥	之	丄 八	ム	✓ム 八	一	之	丄	丁	二返
⑦	之	丄 八	ム	✓ム 八	一	✓コ	ク	丁	
⑧	之	丄 八	ム	✓ム 八丄	七	✓七	七	丁	
⑨	七 ク	ク 七	丄	七 ク	下	✓ム	✓ム	丁	
⑩	八 丄	丄 八	ム 八	八 丄	七	七	七	丁	

訳譜　《上原石上流泉》（①と⑩のみ）



まとめると、この譜式のリズム表記では

- 大譜字は１拍に相当する
- 「丁」字で休止が示される
- 小譜字（左手指による装飾音）は直前の大譜字の１拍に含まれる

という原則が働いており、このように読めば、8 拍からなる周期が複数回繰り返されるという楽曲のリズム構造が明白に現れる。なお、もう１曲の秘曲《啄木》は、当時の唐楽曲等の記譜にも広く用いられた「楽句点」方式を採用している（記譜の行の中で記される朱点で行を 2 拍の単位に分けていく）。リズム構造がより複雑であるためなのか、それとも曲の成立年代・成立事情に関連する事柄なのか、原因の究明を今後の課題としたい。

五線譜化に続く分析の結果、秘曲以外の独奏曲、すなわち「撥合」と残りの「手」にはこうしたリズム構造はなく、フリーリズム（周期的な拍節がないこと）の曲であったとの結論に至っている。そこで実際の演奏での譜字の音価（長短）を決定する材料として、2 種の資料の関連性を探った。

(1) 琵琶の「唱歌」（『知国秘鈔』）

日本音楽のさまざまな種目で用いられる唱歌において、モーラ（音節）数がリズムを示すことがあるので、藤原孝道著『知国秘鈔』（1229）に記録されている琵琶の「唱哥」譜（琵琶風香調《撥合》・同《二手 丘泉》）を検討した。残念ながら当初の予想に反して、琵琶の唱歌は音価にかかわる機能を有していないようである。分析する材料としては量的に不十分だが、モーラ（音節）使用の傾向を略記すると次のようになる。

① 通常の単音にはタとチが用いられる
② 解放絃にはタが用いられる傾向が強く、一方、フレットを押さえた音にはタもチも用いられる
③ 同じ絃の譜字が連続して現れる場合、高い方の音にチが用いられる傾向があり、母音のみで言い換えれば i が a よりも高音になる傾向がある
④ 2 絃を同時に弾くことを示す記号（⎤）にはセイが用いられる
⑤ 左手指の技法（小譜字）にはリ・リン、音高が上がる（柱を指で打つ）時にはンが用いられる
⑥ 用例は少ないが、返撥（上げ撥）はすべてチとなっており、通常の単音とは区別がされていない
⑦ タンやチン、つまりンを加えた音節も現われるが、これは、主に同じ音が続く場合に用いられる。但し後ろに 5 度上の音や 8 度上の音が現れることもあり、この音程が同音と同類のものとして意識されていたことを示すとも考えられる
⑧ ンが音価の延長を示すという機能が認められない

孝道の琵琶唱歌は、独特で珍しいものであり、平安・鎌倉期の他の唱歌との類似点、相違点の問題を今後の課題としたい。

(2)『三五中録』への注記

藤原孝時（藤原孝道息男、1189/90-1266）撰『三五中録』の琵琶独奏曲の譜面に注記や書き入れが多く、中でも「丁」字の右側に点が振られている箇所が目立つ。点の数は 0～3 で、「丁」字が示す休止の音価（長短）を書き表そうとしたものと考えられるので、実際の演奏に際して「丁」字の音価の決定に目安とすることにした。注記の書き主、その他に書き足されている記号(「小」や「一」）について、不明な点が多く、楽譜と楽書の継続的な調査研究が必要である。

最後に、復元試演を通して明らかになった、琵琶独奏曲の音楽的特徴について、簡略にまとめる（雑誌論文①、図書①参照）。

(1)「撥合」と「手」の形式的特徴

「撥合」には同音反復を含むフレーズが多い。中でも 2 本の隣り合った絃を、1 本のみ柱を押さえてもう 1 本と同音とし、弾き合わせる技法が繰り返し現れており、ここにこそ「撥合」（かきあわせ）という名称の由来があると考える。平家語りの琵琶奏法への影響が考えられるところだが、これについては両者の詳細な比較研究が必要となるので、今後の課題としたい。一方、「手」には多くの場合、特徴的なモチーフを含む旋律の反復と、それによる展開とが見られる。稿を改めて詳述したいと思う。

(2)「撥合」と「手」における調性

「撥合」の調整についてみると、目立った特徴が１つある。中国唐の音楽理論で「羽調」の性質をもった音階はそのままの特徴が保持され、琵琶風香調・琵琶黄鐘調は羽調の音階（日本の「律」音階）が用いられている。一方、元々「商調」の性質をもった音階の場合、いわゆる「宮調化」（商調の音階が、日本で「呂」と位置づけられ、宮調に改められた結果）が見られ、これが琵琶返風香調の「撥合」に特に顕著に現れている。

「手」の類は、唐の音楽理論に基づきながら、場合によってはより複雑な調性の在り方を示す。「羽調」の調絃（琵琶風香調・琵琶黄鐘調）はやはり忠実にその性質を保つが、「商調」の琵琶返風香調の場合、商調の特徴を示す手もあれば、転調や転均のために調性が揺れる曲も見られる。

以上、この報告を通して便宜上「復元」「復元試演」といった表現を使ってきたが、厳密にいえば、遺物（例えば正倉院の楽器）は復元できても、一度消えてしまった音楽は完全な「再現」という意味での「復元」は不可能である。そこで、比喩的な使い方だが、本研究の研究課題名には「再生」という表現を使用した。楽譜の「再生」には、楽譜の譜字を

音高と相対的な長さを持った音列に置き換えただけの「文字通り」のもの、一部に演奏慣習や装飾音を加えたもの、現行の演奏様式によるものなど、様々な可能性があるため、より適切ではないかと考えたからである。

〈引用文献〉

① Nelson, Steven G., Issues in the interpretation of notation for East Asian lutes (*pipa*/*biwa*) as preserved in scores of the eighth to twelfth centuries（8 世紀から 12 世紀にかけて成立した琵琶古楽譜の解読における諸問題)、上野学園日本音楽史研究所編『日本音楽史研究』8:巻末(1)-(41)、2012 年 9 月

② 根本千聡、（資料紹介）宮内庁書陵部蔵伏見宮家旧蔵本「琵琶諸調子譜」、『東京音楽研究』82: 27-44、2017 年 8 月

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

① Nelson, Steven G., Reconstructing solo pieces for *biwa* (lute) of eighth to thirteenth-century Japan.法政大学文学部編『法政文学部紀要』77 号、2018 年 9 月発行予定（査読無）

② スティーヴン・G・ネルソン、（エッセー）古典文学と音楽―知識継承の断絶で音楽の意味が消し去られた例―、法政大学国文学会編『法政文芸』14 号、2018 年 7 月発行予定（査読無）

③ スティーヴン・G・ネルソン、〈研究ノート〉『源氏物語』における絃楽器の曲種と調絃について　―古楽譜研究者の立場から―、法政大学国文学会編『日本文学誌要』92: 2-18、2015 年 7 月（査読無）http://repo.lib.hosei.ac.jp/bitstream/10114/12493/1/nbs_92_nelson.pdf

〔学会発表〕（計 4 件）

① スティーヴン・G・ネルソン、中村かほる（琵琶奏者)、8～13 世紀の日本における琵琶独奏曲について、第 12 回中日音楽比較シンポジウム、2017 年 9 月 14 日、上海音楽学院（中国、上海）

② スティーヴン・G・ネルソン、遠藤徹、櫻井利佳、中村かほる（琵琶奏者)、宮田まゆみ（笙奏者)、Roundtable: Reappraising the early history of *gagaku* and *shōmyō*: Reception and adaptation of music from the Asian mainland in ancient and medieval Japan. Steven G. Nelson, individual paper: Reconstructing the lost repertoire of solo pieces for *biwa* (lute). 20th Congress of the International Musicological Society(国際音楽学会第 20 回世界大会)、2017 年 3 月 22 日、東京芸術大学上野キャンパス（東京都）

③ スティーヴン・G・ネルソン、(招聘講演）日本唐楽の古楽譜資料による復元演奏の試みで見えてきたこと、中国と東アジア国際古譜学シンポジウム、2016 年 4 月 16 日、上海音楽学院（中国、上海）シンポジウムの資料集に和文（13-27）及び中文（27-38）の全文を掲載

④ Nelson, Steven G., Towards a verifiable 'reproduction' of the music of ancient East Asia: From decipherment of old notations to music for performance. ICTM MEA 2014 NARA（国際伝統音楽評議会東アジア研究会第 4 回シンポジウム)、2014 年 8 月 22 日、奈良教育大学（奈良県）

〔図書〕（計 2 件）

① Nelson, Steven G. 他、趙維平・植村幸生編、題名未定論文集、上海、2018 年 12 月出版予定（論文〔単著〕「8～13 世紀日本的琵琶独奏曲」〔中文〕）

② 福島和夫、新井弘順、櫻井利佳、高野慎太郎、スティーヴン・G・ネルソン、『日本音楽史料展(雅楽と声明)』／*Materials on Japanese Music History:* Gagaku *and* Shōmyō*, Music of Court and Buddhist Temple*. 上野学園大学日本音楽史研究所、2017 年 3 月、92 (72-92)

〔その他〕（計 3 件）

① 中村かほる（琵琶奏者)、スティーヴン・G・ネルソン（解説)、音楽会の一部「琵琶の秘曲」、第 12 回中日音楽比較シンポジウム、2017 年 9 月 14 日、上海音楽学院（中国、上海)。配付の曲目解説は中・和両文で作成。

② スティーヴン・G・ネルソン（解説)、伶楽舎、Lecture-Concert of 'Tang Music' and Buddhist Chant; Part 1: 'Re-productions' of 'Tang music.' 20th Congress of the International Musicological Society（国際音楽学会第 20 回世界大会)、2017 年 3 月 22 日、上野学園大学石橋メモリアルホール（東京都)。配付の曲目解説は英・和両文で作成。

③ スティーヴン・G・ネルソン（解説)、伶楽舎他演奏者 14 名、レクチャー・コンサート　甦る唐代琵琶譜の音楽　～古代シルクロード・敦煌から正倉院へ～、2015 年 5 月 24 日、浜松市楽器博物館(静岡県浜松市)

６．研究組織

(1)研究代表者

ネルソン　スティーヴン（NELSON, Steven）
法政大学・文学部・教授
研究者番号：60326171